

	<h1>みずみどり</h1>	<p>2005年11月15日</p>	<p>第51号</p>
<p>発行：いたばし水と緑の会 事務局</p>			
<p>年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会</p>			
<p>http://homepage3.nifty.com/mizutomidorinokai/</p>			
<p>E-mail : mizumidori@nifty.com</p>			
<p>〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&fax3969-7124</p>			

昔の雑木林と農業とくらしについて

赤塚にお住まいの沖田さんと本橋さんに聞く(1)



昭和40年頃の赤塚城址の山と美術館のある谷間
(本橋金藏さん撮影)。

沖田さんは114年前に建てられた家に住んでおられる。昔は茅葺きであったが瓦屋根に変え、そのとき縁側を作った。2005年9月26日、に赤塚の雑木林と農業との関わりをお聞きしたいと沖田萬司さん宅におじゃました。小学校の同級生だった本橋金藏さんにも来ていただき、お話をうかがった。お二人とも昭和8年生まれの72才である。

奥様にお団子をご馳走になった。お彼岸で仏様にあげるお団子を作られたのだそうだ。お中日に作るのは「中日団子」、彼岸あけの日(仏様があの世へお帰りになる日)に作るのは

「おみやげ団子という。1升の米の粉で、一五夜には15個のお団子、一三夜には13個のお団子にするので、結構大きいものだった。一五夜、一三夜のお月見には文机に里芋、お団子、一升ビンに挿したススキを供えた。子供の時、よその家のお団子を道具を使って取って食べたが、それは男の子の公認された遊びだった。その道具というのは、1m位の細い竹の先に直角に長い釘を打ったもので、釘でお団子を突き刺して取った。

最近では、雑木林とか里山と言われるが、昔はそんな言い方はしなかったし、この辺の林はテレビで出てくるような雑木林ではない。板橋区は起伏が多く、平坦地はすべて農地にし、畑が出来ない斜面が林になっていた。ため池裏の城址の斜面は100年くらい経ったアカマツ林だった。それも松根油をとるために軍が来て、はじめて「アカマツ林だ」と意識した位である。昭和18、9年頃、陸軍が燃料として松根油を取るために、アカマツを伐採し、その後を放置した結果、雑木林が再生したという。

戦争中は航空機などの燃料不足により、その原料として軍に供出するために荒川河川敷でヒマを栽培(ひまし油をとる)、ドングリまで集めたとか。松根油は実際に使われたという。

燃料について

この辺では、自家の雑木は20年に一度切って燃料にした。切るのは冬で(夏に切ると腐る)、長さ30cm位に切り、割って1年分を軒下に積み上げた。

他に燃料として、稲わら、落ち葉も使った。たたき(三和土)でつくったへっついで、釜でご飯を炊くのだが、稲わらは火のあたりがよくて、本当にうまいご飯が炊けた。

炭は使ったが高かった。消し炭をよく使った。終戦後、1斗缶くらいの大きさの土製の簡易炭焼窯が出回り、それを買って家用に炭を焼いたが、ナラ、クヌギなどを使えば良質な炭が焼けたが、家まわりのあり合わせの木では消し炭と炭の中間のような、あまり火持ちのよくない炭だった。昭和35、6年、東京オリンピックの少し前にプロパンガスが入った。その前、石油コンロを使った時代もあった。

木について

クワ： 養蚕はひいおばあさんの時代までやっていた。糸車、養蚕の道具(かご)などは保存してある。この地域には今もクワの木が残っている。

お茶： お茶は家用に作った。5月上旬、土製のホイロを置き、その上に和紙でできた助炭を使って蒸した茶葉の火入れをし、乾かす。暑い時期につきっきりで茶葉を返さないと和紙が焦げてしまうので大変な作業だった。梅雨明けに再度火入れをし、口のすばまった缶

ヤツポに入れて貯えた。5貫の葉を乾かして1貫のお茶にし、1年間このお茶で充分だった。

カシ：家のまわりには防風林としてカシを植えた。カシは鋤の柄、牛車などに使った。

ムクノキ：このあたりに多い木だが、燃料にもならず、あまり役に立たない木だ。

竹：本橋さんは竹の皮を集めた記憶があるので業者が買いに来たのだろう。沖田さん宅には竹林があり、竹の皮を集めに来た業者にもらった竹の皮の草履(藁と混ぜてつくる)を履いていた。竹の皮の草履はわら草履と違って、雨にも強く、持ちがよかった。昔は落ち葉等を入れるカゴなどはつくった。子供の遊びでは竹とんぼ、鳥かご作り、水鉄砲など、いろいろと竹を利用した。

杉：老人介護施設エーデルワイス(四葉2 - 21)の向かいに杉林があった。杉は昭和35, 6年頃枯れた。原因は公害だと思う。当時はケヤキも2度落葉し、夏に新芽が出たくらいだったから、木には相当なダメージだったのだろう。

動物：

牛や馬も飼っていた。牛のエサは、稲わら、ぬか、ふすまを混ぜたものを与えた。畑の堆肥には牛の敷きわら、落ち葉などを積んで使った。牛は農家の労働を助け、肥料を供給した。ニワトリも飼った。沖田さん宅では100羽。本橋さん宅では10羽位。本橋さんは酉年生まれなので鶏は食べないとずっと鶏も卵も食べなかった。同い年の沖田さんは鶏を食べている。山羊を飼ったこともある。

いなくなった野鳥は、カッコウ、フクロウ、コジュッケイ。10年ほど前にこのへんにコウライキジを見た。

田んぼと水

よく筒竹を地面に刺すとそこから水が出てきたと言われるが、そのようなことはなかった。耕地整理後、田んぼの水が抜けやすくなった。地下水位が下がったことも原因だと思う。そこで取水口に見回りに行き、自分の所の田んぼに水を入れるのが子供の仕事だった。しばらくすると、自分の所の田んぼには水が入っておらず、別の田んぼに水が行くようになっていて、またそれをうちの田んぼに入れるようにするなど、始終だれかが取水口に行って、水の取り合いをした。それでも大門池付近の田んぼは、もぐってしまうほど泥深くて、水が抜けるということではなかった。このような深田では、田舟を使い、また板や棒を水面に浮かべて身体が沈まないよう工夫しながら作業した。(泉 貞代、坂本 郁子)

(以下、次号に続く)

梅まつりとトンボ池 溜池公園界隈で

この春、実に久しぶりに「梅まつり」に行った。いや赤塚溜池界隈にはかなり足しげく通っているから、その機会の中で「出会った」といったほうがよい。

溜池の梅林を、松月院への通りを隔てた台地の上から見下ろす。紅梅白梅にまじり緑があった黄色の花も見える。草木には詳しくないので、その黄色い花が何という梅なのか、あるいは梅ではないのか知らない。知らないが美しいことにはかわりない。背景には城山の緑が芽吹いていた。

台地上から満開の梅林を見たのは初めてであった。中台から徳丸の高台の背をバス通りの騒音を避けて歩き、家々の庭先に咲き始めている花などを見ながら、大門の竹の子公園、浅間神社の小さな祠、諏訪神社を経て、この台地(古くは滝の上地区)についた。眼下に開けた梅林の美しさは、先に下の梅を見てから台地に登るという行程では味わえなかったに違いない。同行の友人と交わした言葉は月並みなものに終わったのを覚えているが、2人ともささやかな発見に酔っていたのだろう。

琴の音がわずかに聞こえる。そういえば梅まつりの演奏会と思い出して公園に降りた。確か公園の中ほどに舞台がしつらえられていた筈だと友人に話しつつ、屋台で缶ビールを仕入れて行くと、舞台は美術館玄関付近に移動していた。記憶にあった舞台のあたりには小さな池がある。この池も見慣れてはいたのだが、いつ頃からあったのかは説明できなかった。そして城山上の栽培林であろう梅林の中のベンチで公園政策などの勝手を吹きあつたりした半日を過ごしたのだ。

さて、池は「トンボ池」という名であった。

僕がそのトンボ池をあらためて意識したのは以上のような経緯であったが、その後「いたばし水と緑の会」の方々に知己を得、同会が区から委託を受けて城山上の「バッタ広場」とともに日常的なお世話をされていることを知った。

文字どおり「トンボが成育できるあるがままの自然に戻す」ことを目的に作られたそうだが、その環境は達成できていないように見える。前記したように今の設営場所は移動しているが、舞台の土台に使うとされたコンクリートの塊が池の中にあり、近在の方が金魚やザリガニを放流したりもすると聞いた。何の知識もなく一見すれば、泥っぽく手入れの悪い池だ。会の成立やご苦労は僕が書くことではないが、費やされた労力を想像するに、悲しい現実ではある。

しかし悲しい現実は決して結論ではないだろう。都市に住む人たちの「自然」のとらえ方、

行政、歴史とは言わないまでもそれぞれの地域の時間の経過など、それらが錯綜して、トンボ池というひとつの小さな試みについても壁となっているのだろう。その壁を打ち破る方法論はいったい何だろうと思う。それは、僕らがかかえる他の問題についても有効であるはずなのだが.....。

結論はまだ求めない。なお溜池界限もその一部である都立赤塚公園の発端は、戦前1939年策定の「東京緑地計画」によっているという。これをもとに1943(昭和18)年32.7ヘクタールが緑地として都市計画決定された。現在公園の供用は25.2ヘクタール。差はどこへいったのだろうか。練馬区にまたがる城北公園では44ヘクタール余がその時期に用地買収までされているが、うち28ヘクタール余が戦後の農地解放の対象となり、当然現在は宅地だろう。同様の経緯があるのか、こんなことを調べることもどこかで前記の方法論につながっていくだろうか、などと考えている(村上和生・中台在住)。

バッタ広場が子供達でにぎわっている

8月にエノキとクズのジャングルを切り開き、すっかり見通しのよくなったバッタ広場に子供達の歓声が聞こえます。虫の卵などおもしろいものを見つけてなんだろう、とのぞき込んだり、エノキの枝を拾ってトンボを止ませたりと、格好の遊び場所になっています。刈り込まれた草地とまったく異なる変化に富んだ草原は、生き物の生息場所として、人間の子供の遊び場として、大人の私達にとっても自然に浸れる空間として、大切にしたい。



トンボ池観察ノートから(10月23日 6時36分)

諏訪神社下の赤塚公園でハバビロカマキリが杭(柵)の上に下向きにとまっていた。大きなもったりした太い腹。妻は不気味だわと言う。2週間前位にも同じようにしていた。

ジョロウグモがアオマツムシの腹部に口を付けて、体液を吸っているようだ。まだ中くらいのクモ。

今、トンボ池をのぞいていた妻が、池の中の1m位の草の上にハバビロカマキリがいると呼びに来た。やはり草の先に、下向きに腹を見せて動かない。

「いたばしの自然と農業」の本をつくりたいという話

みずみどり50号で、「続 聞き書き 里山の暮らし - 土浦市宍塚」という本の紹介がありました。地元の自然保護団体がまとめたものです。板橋区にも同じような里山の暮らしがあり、それでいて板橋固有の自然との付き合い方があったと思われます。これをふるさと板橋というのかな。

里山の暮らしー循環型ライフスタイルーは、「持続可能な生産活動」のお手本として見直されています。地球環境問題など大量生産、大量消費、大量廃棄がゆきづまりを見せている今、50年前の生活には戻れないまでも、自然とのふれあいをとりもどしていきたい、と思う人は増えているはず。そして将来の地域の自然生態系を考え保全再生していこうとするならば、少し前の自然を知らなければなりません。

釣巻さんから、「板橋版 聞き書き 里山の暮らし」をまとめた本を作りたいという提案がありました。自然を上手に利用していた農業体験者からわたし達が学ぶことは多い。でもだんだんご高齢になってきています。

しかし、市民だけでこのような目標に向かって、計画を作り、多くの方と連携し、役割を分担し、動き出せるのか、経験もなく、わかりません。ご意見、参考になる情報、やってもいいよ、等々ご意見をお寄せください。



板橋区議会に地下水保全の陳情の審議を初傍聴

私達が提出した

前号で、既得権を盾にとり、温泉と井戸水合わせて1日に353トンもの大量の地下水を汲み上げて営業しようとしている前野町のスーパー銭湯に対して、地盤沈下対策等の観点から、井戸水使用量を減らすよう指導をしてほしいという陳情書を提出したことを報告しました(公衆浴場組合も同様の趣旨で請願を提出しています)。私達は9月30日に続き11月8日の2回目の区民環境委員会における審議を傍聴しました。陳情も初体験ながら、傍聴も初体験。こういう形で区政に関わるとは思ってもいなかったのですが、いい勉強になりました。

地下水の大量汲み上げによる直接的な環境への影響ですが、「深さが200m以下の深井戸なので、地盤沈下はすぐには表れないが、注意が必要」という東京都土木技術研究所の見解から、すぐには地盤沈下は起こらないらしいが、起こらないという保証もないらしい。実際に地盤沈下してからでは手遅れで、そのまえに行政の責任としてしっかり取り組みをしてほしいという議員のみなさん意見を聞き、大変心強く思いました。

今は地下水の汲み上げ規制が非常に厳しくなっていますが、まさに法の狭間で、昔工場で使っていた井戸に対しては、用途を浴場に変更してもよく、使用水量も制限なしに汲めるといのはどう考えても変な話。環境保全を無視して既得権を主張する相手に、環境保全課がどこまでも環境保全の姿勢をつらぬき、ねばり強くがんばってくれることを願って見守っていきたいと思います。もう一つの陳情事項「崖線の保全、雨水浸透等による地下水の積極的涵養、地下水の汲み上げ制限等を盛り込んだ「板橋区湧水・地下水保全条例」を制定してください」についても積極的な意見が出されましたが、行政側からはよい回答はありませんでした。

あなたも会員になって会を支えてください

- ・ 定例活動日：第4土曜日城址公園他の観察会および清掃活動。
- ・ 定例作業日：毎週水曜日 10時～12時。ピオトープ(生き物のための環境)の点検や、必要な維持管理作業を行っています。
- ・ 年会費は2000円です。情報誌の印刷代、郵送料、自然地の維持管理に必要な資材費になります。

連絡先:いたばし水と緑の会事務局 瀬田 TEL&FAX3969-7124

mizumidori@nifty.com

活動のお知らせ

運営委員会は毎月第1金曜日です。どなたでも参加できます。

12月運営委員会： 12月2日(金) 18:30～20:30

1月運営委員会： 1月6日(金) 18:30～20:30

いずれもエコポリスセンター環境学習室です。

会報の印刷・発送は奇数月。お手伝いできる方はよろしく

日時：1月17日(火) 17:00～ 場所：エコポリスセンター

変更する場合もあるので、事務局にお問い合わせ下さい。

活動の問い合わせは瀬田まで(3969-7124)

毎月第4土曜日が定例の活動日です。この日は、赤塚や徳丸が原公園で私たちが作った自然の場所を中心に自然観察やゴミ拾い、課題が合った場所について別途必要な修理等を行っています。原則として雨天も実施します。

11月の活動 ミントンボ池再生の新作戦

再生をめざす浄蓮寺下の湧水池で新たな作戦を開始。ザリガニの住みにくい環境を工夫します。

日時:11月26日(土)10:00～12:00

集合場所:美術館前トンボ池

持ち物:ゴム手袋、長靴、胴長のある人はぜひ。汚れてもよい服装で。

生き物のすめる環境整備の活動(平日の水曜日)

伐採した枝の整理とバッタ広場の柵をつくります。

連絡先:坂本 090-4618-1295

熱帯植物館企画展「なつかしい日本の里山展」と講演会

内容:里山と暮らし、里山の動植物、里山とわたし達(板橋区の雑木林と釣巻さんの昆虫の展示もあります)

日時:11月1日(火)～27日(日) 10時から18時(月曜日休館)

入館料:大人220円、小中学生および65才以上は110円

講演会 11月27日(日)13:30～14:30「里山の自然」(於 熱帯植物館)

講師は、いたばし水と緑の会でもお世話になっている藤本和典先生。板橋の自然をスライドで紹介されます。みんなで参加しましょう。

申込先:熱帯植物館 5920-1131